

ゴミ、捨てんなよ!



*The wisdom under the Tree.*

# ソトコト編集長の水循環論



# 父と母、子の水循環

























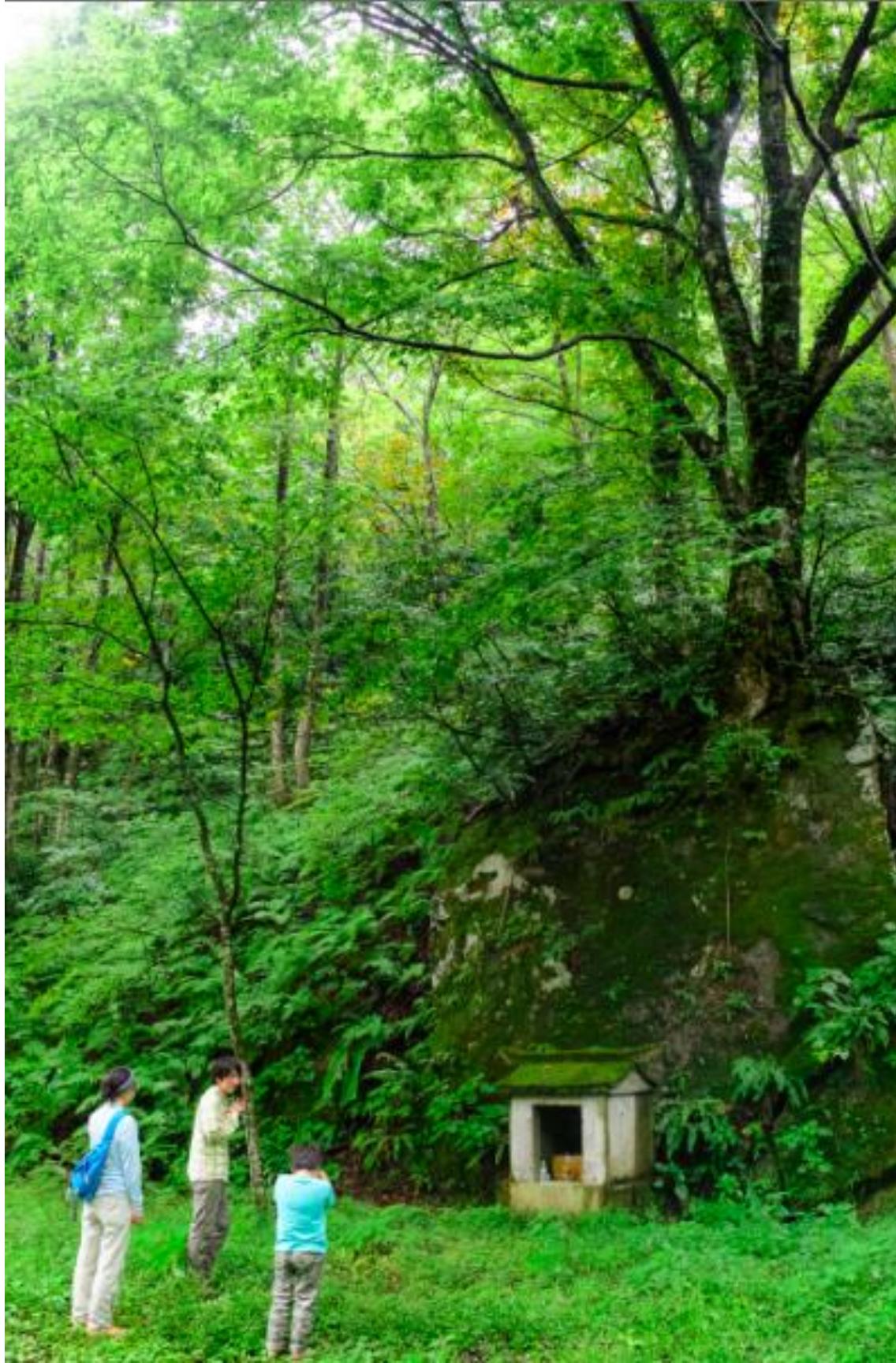














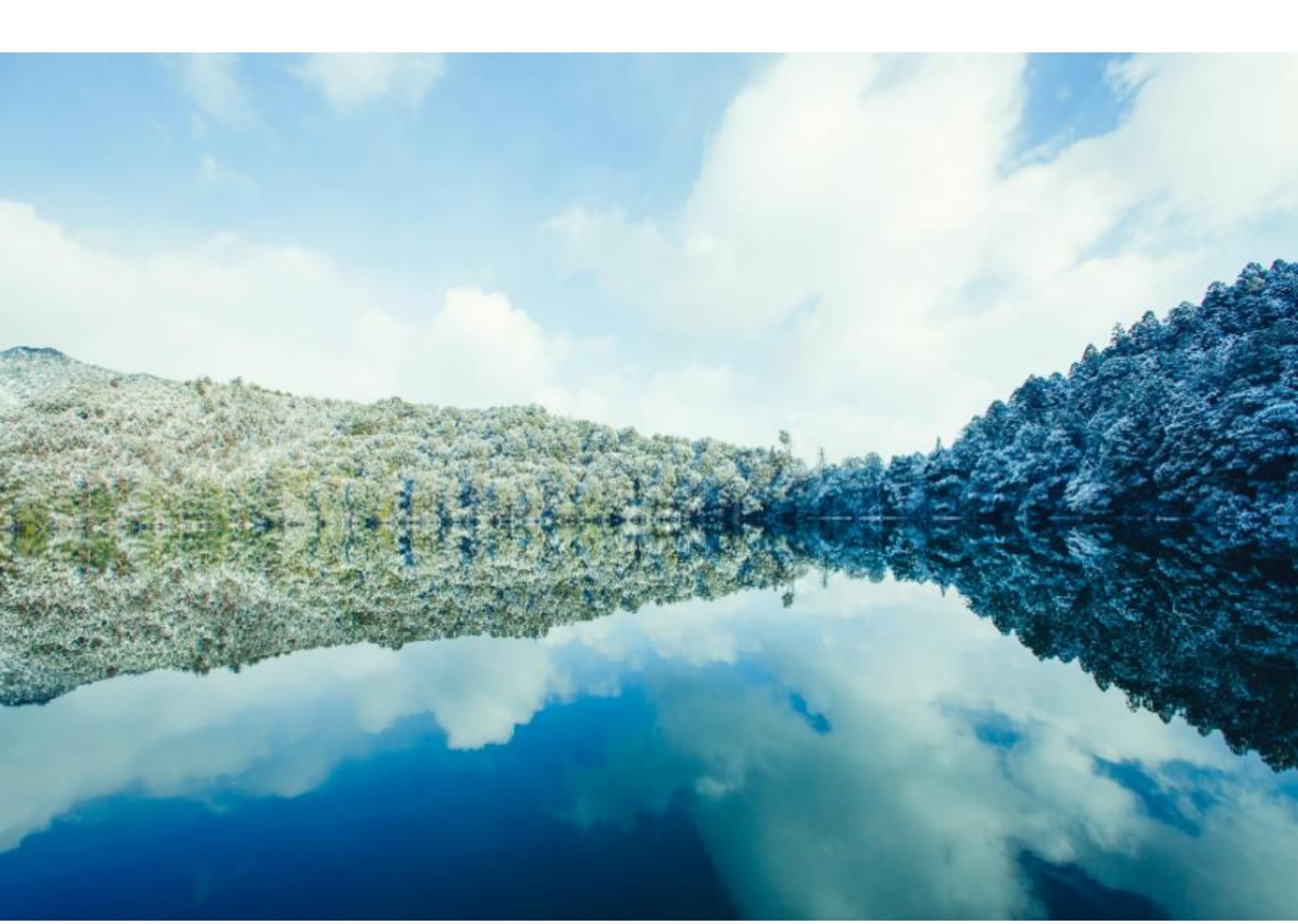


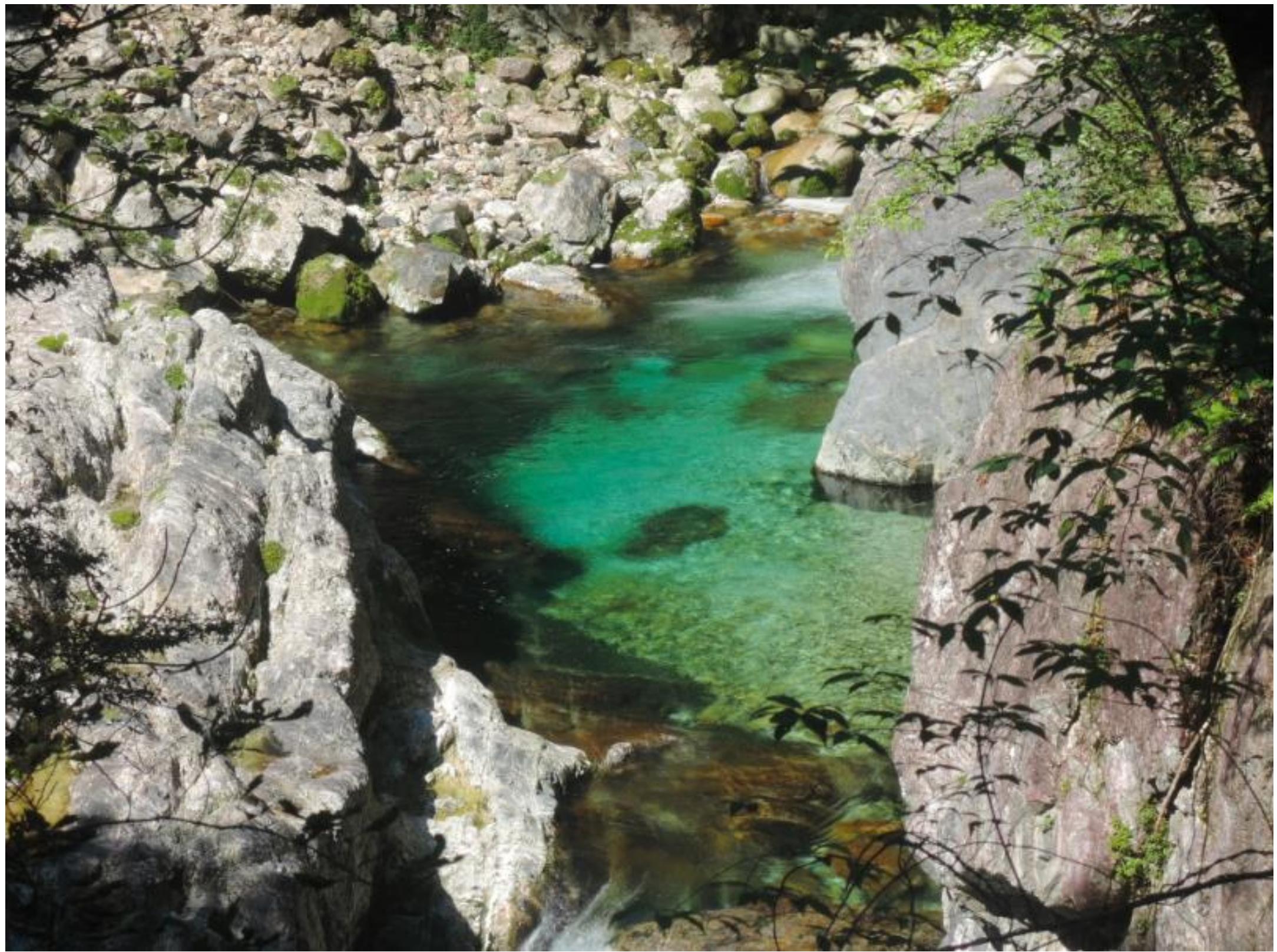




# 若者たちの水循環



























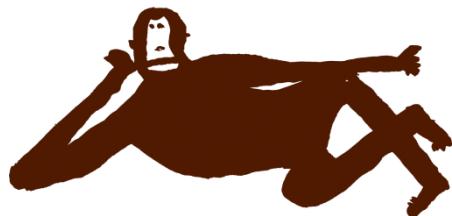






# 地元を愛する水循環

ゴミ、捨てんなよ!





















# 源流点で学ぶ水循環







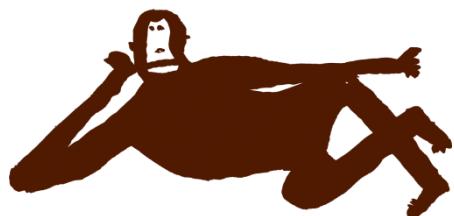






# 水循環の場所づくり

ゴミ、捨てんなよ!



滋賀県  
長浜市からはじまる、  
ソーシャルな  
うねり。

# どんどん橋プロジェクト

滋賀県長浜市街地のどある路地裏に、コンクリート製の小さな橋が架かっています。

その橋のたもとにある長屋2軒分を改築し、農家や建築家がシェアするプロジェクトが始まりました。

photo: soto by MOTOKO text by Hisaki Inoue

小さな橋のたもとで  
町の「ストック」を見つめます。

長浜市からはじまる、  
ソーシャルな  
うねり。

化や自然に馴染んでいく。なかでも、琵琶湖を含む生態系や、そこに結み合った人々の生活が新鮮だった。  
「僕の育った町には長浜ほどの古い町並みが残っておらず、ここに来て

エキゾチックな気持ちになれた」。外からの視点で長浜を見渡すと町人の「ストック」がたくさんあります。長年人が gammie ひらき継いできたものだ。ただ、その「ストック」も絆離れると朽ち果てていく。しかし、

長浜には、こんな動きが次々と生まれつつあります！

国街道と大芦通りが直交する界隈は、町家が軒を連ね、民家や商家として実際に利用されている。町の中心部から徒歩10分ほどの場所に面田い名のコンクリート型の橋がある。かつては木製で歩くときに弾むつな音がしたことから「どんどん橋」と呼ばれている。その橋のたもとにある第80年ほどの長屋をリノベーションし、シェアスペースとして使うプロジェクトが進行している。その名も「どんどん橋プロジェクト」。

園庭ブランナーの竹村光雄さんは、市に住む仲間たちと共にこのプロジェクトを進めている。「建築家のオフィス、農家の加工所、野菜を売るスペース、小さな集会ができる場所をつくりたい」と話す。竹村さんは、

茨城県日立市出身。都市計画の仕事を長浜に出合った。竹村さんは時間

を具つけては周辺を歩き、湖北の文

❶ 案定館80年ほどの長屋、ワークショップをしながら改修を進める予定だ。❷ 木材のが「粗削ぎ」された形材。この材は水害が多く、失人たちは原木で長年使ってきた。何度も直しながら使っていかいでね」と竹村さん。❸ 川の水の色が塗られた屋根が物凄い川の水にイネクジクの木ね。

施設に見える家も改修して、人が集まらなければならないだろうか。竹村さんの周りには仕事や遊びでつながった農家、建築家、デザイナーなどの仲間たちがいた。「彼らが集まる活動拠点をつくらないだろうか」。 「みたて農園」の立見夫妻は以前から食品加工をする場所があればいいなどと考えていた。個人でつくれば数百万円の出費、加工所がほしいけど、それでも足を踏む農家が多い」と立見さんは言う。キッチンスペースや必要な機材を置けば、農家が使えるシェアスペースとして使えるし、販売も可能だ。設計士の佐野さんも町中に事務所を構えたいと思っていた。「だいたい、共同オフィスとして使ってみたら」と考えた。佐野さんは事務所兼住舎もしてもらいました」と竹村さんは苦笑む。町の上の世代たちからは、「ここまで傷んだ建物を改修する意味がわからん」と笑はれた。「だけど、住民親は違うでも若者も年配世代も『長浜らしさ』が大切と言ふ。今まではその言葉の意味が世代間の隔たりがあり、そこそろ同じ湖北像を持つべき時代がきているのかもしれない」



February 2016 SOTOKOTO 078

立見真美さん 「みたて農園」の農品を使った料理や加工、ワークショップなどを企画中。	立見 澄さん 「おいしい米を育みたい。」	年中地元野菜が貰える場所に。	長浜の魅力をウェブで発信。	店番兼 建築家です。	大量生産＆消費の次の社会を！	老若男女が集まる場所をつくる。
--	-------------------------	----------------	---------------	------------	----------------	-----------------

七瀬優光さん 「はんのり農園」代表。米農業、古本本物の米屋・長浜の米をここで販売。	村上裕一さん 農業を伝えるWebアガシ・ナガシ代表。農業、地域活性化、シェアスペースなどを運営。	佐野元開さん 設計士、「MAPLE extension」代表。死ぬほど愛するWebアガシ・ナガシ代表。農業、ウェブを通して活動や情報を発信。	竹村光雄さん 「長浜らしさづくり式会議」代表。外から来れるショップ立ち上げのノウハウを生かす。
--	---	---	--



どんどん橋の上に立つ「どんどん橋プロジェクト」のメンバーさて、これからどんな物語が生まれるか、もうご期待です。

**どんどん橋プロジェクトメンバーって?!**

滋賀県長浜市の  
水辺まちづくりトーク in 東京

美しい水辺のまちづくりが注目される長浜。「どんどん橋プロジェクト」のメンバーとともに、長浜の魅力や、これからのまちづくり、ローカルの可能性を語るイベントを開催します。長浜のおいしい食べ物をご用意して、みなさまのお越しをお待ちしています!

日時 / 2016年3月6日(日)15:00~17:00  
場所 / 東京・有明(コハスカフアRIAKE)  
(武蔵野大学キャンパス内)  
tel.03-3549-1011(ソトコト編集部)

ファシリテーター:指出一正(ソトコト編集長)

❸ 民家の屋を流れる米川。大雨などで水量の多い季節には、まだにあふれることもあるそう。❹ 各々の裏には、水路とつながる出入り口がある。かつては米や野菜などを売りに来る商人が舟で訪れたといふ。

❻ ちゃんと橋を架けよう! みんなで手をつなぎ、橋をつくる。たくさんの人が訪れる。











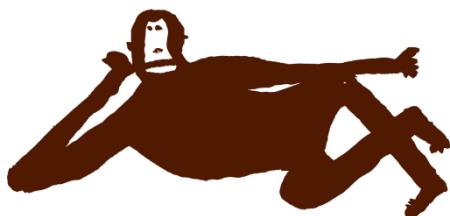






『U・STYLE』の、  
新潟らしい表現力。

ゴミ、捨てんなよ!





仕事に携わったことから鳥屋野  
潟に关心を持ち、2015年に  
現在の場所に事務所を移転した。  
「昔の鳥屋野潟は、漁をしたり、  
泳いだり、カッフルはボートに乗  
ってデートを楽しんだりと、  
豊かな暮らしがあったことを知りました」と代表の松浦  
和美さんは言う。ただ、高度経  
済成長期に急増した住宅からの  
生活排水などによって、水面に  
洗剤の泡が立つほど鳥屋野潟は  
汚染されてしまった。水辺から  
人々の笑顔は消え、ウナギやコ  
イなどが盛んに収穫された潟で  
の漁業も行われなくなつた。

その後、下水道の整備や「鳥  
屋野潟漁業協同組合」の環境改  
善活動によって潟の水質は向上  
したが、人々と潟の距離は開い  
たままだった。ディレクターで、  
和美さんの次男の松浦柊太朗さ  
んも、「『ビッグスワン』にサフ  
カーを観に行くことはありまし  
たが、潟には立ち寄りませんで  
した。潟で遊ぶこともなかつた  
です」と子どもの頃の印象を語  
る。「護岸整備がされていない  
りなくて、『潟マルシェ』を始め

て女性版「潟ガールズ」も発行  
し、ほかの媒体でも鳥屋野潟の  
魅力を発信したこともあり、鳥  
屋野潟は再び注目される場所に  
なつていった。鳥屋野潟をさら  
に人々の暮らしに近づけたのは、  
移転後にスタートし、16年から  
は鳥屋野潟の森の一角で開催す  
るようになった「潟マルシェ」  
だ。「鳥屋野潟では昔、舟に魚  
や野菜を積んで市場や料亭に卸  
していた時代があったそうですが、  
そんな懐かしい潟の水辺につく  
りなくて、『潟マルシェ』を始め

山潟中学校科学部「人を彼らる」新・達五郎八人衆



地域のコミュニティを  
大ににして  
生み出される、  
やさしさあふれる  
デザイン。

鳥屋野潟  
好き!



潟ボーイ's &潟ガール's  
『U-STYLE』が鳥屋野潟に関わった  
初期の頃からの作品。古き良き鳥屋  
野潟を知る祖父母世代や鳥屋野潟  
をフィールドに活躍する若者を取材。

ひろびろ、潟のデザイン。



とやの潟ウインターキッチン  
島屋野潟の漁師が捕った魚などを使い、飲食店が独自のメニューを考案し、味わう。料理教室「こどもキッチン」も開催。

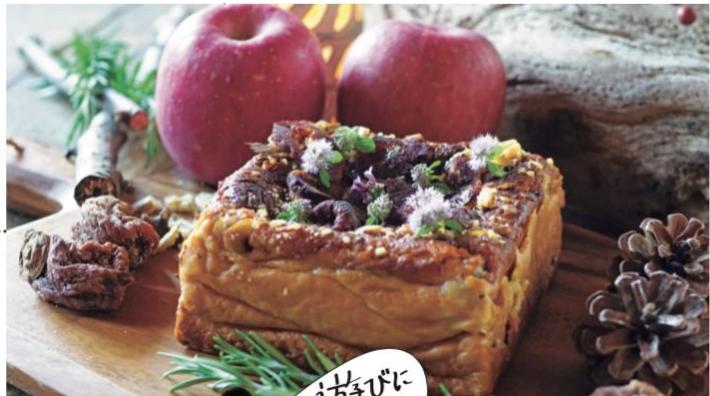
ました」と和美さん。  
担当する終太朗さんは「潟マ  
ルシェ」企画運営するなか  
で大切な学びを得たことを話す。  
「潟マルシェ」で自然栽培され  
た野菜を食べたとき、土のエネ  
ルギーを感じ、心を動かされ  
した。その年の秋には、上越市  
の大原集落に暮らす祖父の田  
んぼで、前年の種が落ちて米が  
勝手に生つっているのを目にして  
米のエネルギーに触れ、翌年か  
ら祖父母に代わって仲間と一緒に  
米を育て始めました。「でき  
ることであり、自分らしい生  
き方にもなった」、「潟マルシ  
エ」の出店者の正直なものづくり  
や、自然や食べ物の力強いエ  
ネルギーを感じるなかで、「自  
分も正直でありたい」という想  
いになったのです」。

終太朗さんにとってそれは樂  
しいことであり、自分らしい生  
き方にもなった。「潟マルシ  
エ」の出店者の正直なものづくり  
や、自然や食べ物の力強いエネル  
ギーを感じるなかで、「自分  
の手でつくりたい」と思うよう  
にしました。「潟マルシェ」  
の手でつくりたい」という想  
いが醸成され、自分らしく  
生きるヒントを得ました。ただ、  
自分が楽しく生きる一方で、自  
然環境に負荷を与える、世界の見  
知らぬ人を不幸にしてはいけな  
い。楽しく暮らしながらも生活  
の背景にあるものに目を向ける  
という姿勢を「潟マルシェ」か  
ら学びました。その学びを、押  
しつけるのではなく、ゆるやか  
に提案する場として「潟マルシ  
エ」をデザインしています」。



みんなが仕事に集中すると、事務所は静かな雰囲気に。  
20代、30代の「新潟愛」を持った若い世代が、デザインの力で地域の新しい価値を創造する。

地  
域  
の  
コ  
ミ  
ュ  
ニ  
テ  
イ  
を  
大  
に  
して  
生  
み  
出  
さ  
れ  
る  
や  
さ  
し  
さ  
あ  
ふ  
れ  
る  
デ  
ザ  
イ  
ン



### 麹チーズ ケーキ

大原産の玄米甘酒や無農薬干し柿など地域の素材を原料にしてデザインを施し、販売。地域の農家とのコラボレーションの賜。

### OHARA CRAFT

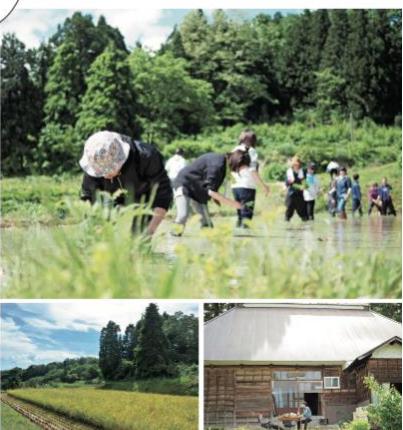
終太朗さんたちが大原集落の畠で育てて収穫したローカルクラフトビール。「潟マルシェ」でも販売。

すくすく、山のデザイン。



### 大原事務所

人が集まれる場づくりとして大原集落の祖父母の家をリノベーション。地元の大工さんの協力を仰ぎながら2階に事務所、1階にキッチンを設けた。19年に本格始動!



### 大原の田んぼ

上越市の大原集落で終太朗さんが仲間に誘って行っている米づくり。「山のデザイン」の原点とも言えるプロジェクト。



### OI OHARA CRAFT LOCAL CRAFT BEER

BELGIAN ALE

×

新潟大原産コシヒカリ

NIIGATA

人が集まる場づくりとして大原集落の祖父母の家をリノベーション。地元の大工さんの協力を仰ぎながら2階に事務所、1階にキッチンを設けた。19年に本格始動! その後、大原集落で働き回って遊んでいました。でも、今や集落の人口は五十数人、安堵区でも2400人ほど。高齢化し、限界集落になりつつあります。それでも時代の流れだと諦めることは簡単ですが、私は嫌。自然との関わりや暮らしの知恵をデザインし、人が集まる魅力的な場づくりを行いたいです」と和美さんは話す。大原で得られた地域活性の知見を、いずれはほかの中山間地域にも展開していくといった意気込む。

『U-STYLE』の事務所はテナントだった建物を借り受けたもの。  
木の温もりを感じる室内やテラスに、社員やインターン生のセンスで壁などに装飾が加えられている。



### 潟のしづく

新潟の郷土玩具「三角だるま」をリーデザイン。季節や地域に合わせた新たなデザインを加え、職人とともに文化をつなぐ。



### 潟ボーイ's

潟ガール's

2



潟ボーイ's &潟ガール's  
『U-STYLE』が鳥屋野潟に関わった  
初期の頃からの作品。古き良き鳥屋  
野潟を知る祖父母世代や鳥屋野潟  
をフィールドに活躍する若者を取材。

ひろびろ、潟のデザイン。



### キッチントラックMullet

子育て奮闘中の社員・江留伊さん柔軟な働き方を整えるために導入されたMullet(マレット)。ユスリカの森に出店。



### webデザイン

県内の企業や学校などのwebサイトのデザインも多く請け負う。地域に密着した仕事ぶりは高い評価を得ている。



### とやの潟アウトドアピクニック

キッチントラックMulletが中心となり、平日は親子で過ごす場を提供。鳥屋野潟の自然を楽しむワークショップも開催。



### 潟マルシェ

鳥屋野潟のイメージを一新したイベント。5月から10月の第2日曜に開催するオーガニックなマルシェ。カヌー体験も実施。



とやの潟ウインターキッチン  
島屋野潟の漁師が捕った魚などを使い、飲食店が独自のメニューを考案し、味わう。料理教室「こどもキッチン」も開催。

ローカルの仲間や先輩たちとともに、その表現力はパワーアップしていきます！

新潟も東京も、  
同じ「ローカル」に足る。

話す。

新潟も東京も、同じ「ローカル」と捉える。

ンしています」と笑顔で話す。



県立鳥屋野潟公園  
管理する浅野涼太さ  
る。②『鳥屋野潟漁業  
組合』代表理事の  
井勝弘さん(左)と理  
の大野彦彦さん(右)。  
凍ボラをもらって笑  
る柊太朗さん。③裏  
で投網の熟練技を披  
する増井さん。

人々の情熱を受けるながらデザイナーの仕事を行う「U・STYLE」。

ーとして関わる松太朗さんは、「編集長の指出一正さんが、『昔、私駅の駅にあった伝言板や、雑誌の後ろのページに掲載されていた「ボーカル求む!」みたいな3行広告のイメージでつくりたい』と。僕が学生の頃に住んでいた東京・下北沢の駅前にも伝言板があり、あのぶっきらぼうな手書き感が好きでした。それを思い出しながら作業しています」と話す。制作担当のデザイナー・新保貢さんは、「写真も使わず、モノクロで、文字の書体や組み方だけでデザインするのが楽しいです。キヤツチコピーワークを決めるときも、仕事か遊びかわからぬほど盛り上がりがつて、普段着のままデザイ

イタ

## LOCAL WORK & PLACE

ロゴデザイン

求人サイト「イタ」のロゴマーク。新保さんの手書きを元にデザイン。ゆるくて整っていない書体が「イタっぽいでしょ?」。

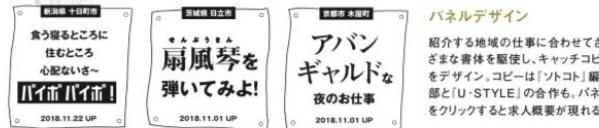
# イタノダ

# イタノア



日工試作

ロゴマークはwebサイトのコンセプトを示す重要なアイコン。「ああでもない、こうでもない」と試作され、最終形に昇華されていった。



パネルデザイン

紹介する地域の仕事に合わせてさまざまな書体を駆使し、キャッチコピーをデザイン。コピーは「ソトコト」編集部と「U・STYLE」の合作も。パネルをクリックすると求人概要が現れる。



## 水循環を広める ソーシャルな視点

1. 関係人口を増やす
2. 未来をつくっている手応え
3. 「自分ごと」として楽しい

ソーシャル & エコ・マガジン

未来をつくる仲間が増えています!

# シトコト

ありがとう20周年!!



ゴミ、捨てんなよ!

